

リスペクタブルな未婚の母

ウェットナース
ヴィクトリア時代の乳母をめぐる言説

中 田 元 子

1. はじめに

1861年11月2日の*Times* 求職欄に次のような広告が出された。

“WET NURSE. Respectable, single, age 23. Baby three weeks old. Well recommended.”

乳母として働くことを望んでいる23歳の女性が、自ら未婚の母であることを明らかにして、しかもリスペクタブルであるといっている。未婚で子どもを産んだ女性がヴィクトリア時代の社会通念からいってリスペクタブルであると主張できるのだろうか。しかし、単純に「否」と答えられないのは、きわめて短い広告文のなかであえて未婚の母であることを明らかにしているからには、この情報は確実に有効であったのだらうと推測されるからである。未婚の母はいかなる意味においてリスペクタブルな存在たりえたのだろうか。

本論では、ヴィクトリア時代の乳母をめぐる言説を分析し、「リスペクタブルな未婚の母」という一見矛盾する広告文句がどのような意味を持つのかを探る。

2. 19世紀イギリスの乳母雇用の実態と乳母のイメージ

ヴィクトリア時代のミドルクラスを対象にした育児書では、母親が授乳することが強く勧められている。母乳を与えることは自然の掟、母親の義務であるとする一方、授乳しない母親は獣にも劣る存在で、母親としての愛情に欠けているなどとして非難されている (Bull 15; Chavasse, *Advice to a Wife* 255, 289)。このように母親の授乳を規範とする環境においては、授乳を他人に任せること、すなわち乳母を雇用することは、母親が出産時に

死亡した場合、あるいは病気であるなど、どうしても母乳を与えられないときのみに許される手段と考えられた。

しかし、母親の授乳を規範とする言説が支配的であったにもかかわらず、19世紀においても乳母雇用がある程度一般的であったことを推測させる事実がある。たとえば、母親が授乳するよう熱心に勤める育児書にも、必ず「乳母の選択と管理」といった章や項目が含まれていた。¹ また、*Times* に掲載された求職・求人広告を調べてみると、19世紀半ばには、乳母の求職・求人広告が毎日のように掲載されており、乳母の広告件数は1860年代にピークを迎えている。² 世紀後半になると人工哺育も発達してくるが、その信頼性はなかなか高まらず、乳母雇用が完全に廃れるまでにはかなりの年月を要した。³ 19世紀イギリスにおいては、母乳哺育推奨の陰で、乳母雇用は子育ての選択肢として確実に生きていたと考えてよいだろう。

実生活でも乳母を雇った経験のある Charles Dickens は、*Dombey and Son* において乳母を理想的な代理母として描いた。この作品で乳母 Polly は、ドンビー商会の跡取り息子として待ち望まれて誕生したものの、出生と同時に母親を亡くした Paul を、自らの乳で養い育てるばかりでなく、男でないというだけの理由で父親から疎んじられている姉娘 Florence の精神的な支えともなる。しかも後に Dombey が全てを失って失意のどん底に落ちたとき、かつてただ一度犯した過ちのために自分をクビにした元の主人を見守るために戻って来さえるのである。⁴

しかし、このような肯定的乳母像は例外的というべきで、大方にとって乳母は問題の多いやっかいな存在として認識されていた。たとえば、Mrs. Beeton によれば、ミドルクラスの母親たちにとって、乳母は“that ever-fruitful source of annoyance” (473) であると考えられていたとのことである。我が子の生存がかかっているために、たとえ傍若無人な振る舞いをされても黙認せざるをえず、とくに若い母親にとっては扱いにくい存在であった。また、給料・待遇が格段によかったので、他の使用人の妬みを買ったり、労働意欲を失わせることもあった。⁵

また、乳母は、下層からの汚染の恐怖を感じさせる存在でもあった。乳を通じて、授乳者の気質や道徳的性質が子に伝わると長い間信じられており、育児書でも乳母を選ぶときはこの点についてよく注意するよう指示されていた。⁶ Ian G. Wickes によれば、1897年に Edmund Cautley という医師が *Feeding of Infants* において、300年にわたって信じられてきたこの考えを「まったく根拠がない」と否定したとのことだが (418)、これは逆に

その時点でも依然としてこの考えを信じている人がいたことの証拠といえるだろう。また、実際に乳母が梅毒を媒介する場合もあったことを考えれば、乳母への警戒心は当然のものだったといえる。⁷

3. 未婚の乳母の需要 *Times* の求職・求人広告

授乳者の道徳的性質が子に伝わると信じられていたとすれば、不道徳にも未婚の母となった女性を乳母として雇うことは、できるかぎり避けるべきことであっただろう。雇用に際して医師の診断書とともに結婚証明書が要求されることがあったことも、既婚の乳母が望ましいと考えられていたことを物語っている。

しかし、冒頭に引用した乳母の求職広告が示唆しているように、未婚の母が乳母として求められることもあったのである。さらには、雇用主側からの求人広告でも、未婚であることを条件にしたものが出されている。1871年1月5日の広告では、“A WET NURSE (single) WANTED, for a young baby.”とあり、乳母に求める条件は未婚であることだけで、通常雇用主が求める、候補者の健康状態、子どもの月齢、医師の推薦書などについての指示はまったく記載されていない。

もっとも、統計をみてわかるように、未婚であることを明らかにしての求職広告は全体からみれば確かに少数派であり、既婚であることを宣伝文句にしている求職者のほうがはるかに多い。⁸しかし、求職広告全体としてみると、未婚、既婚の別を記載していない広告が圧倒的に多く、これは未婚を不道徳とみなす社会通念にしたがって未婚であることを隠しているとみなせば、未婚の母の乳母候補者が非常に多かったということになる。

このような求職・求人広告が暗示しているのは、リスペクタブルな既婚の乳母を求める雇用者が多かったであろうという当然の予測に反し、雇う側の要求として、未婚、既婚ともに希望があったということ、とくに、意外なほど未婚の乳母の需要があったらしいということである。

4. 未婚の乳母論争

なぜ未婚の乳母が求められたのか、その理由を探るために、1859年から60年代初めにかけての乳母論争をみてみたい。この時期、*Lancet*, *British Medical Journal* といった医学雑誌において、未婚の母を乳母として雇うこ

との是非について議論が戦わされた。医学雑誌で乳母が問題になったことといえば、以前、乳母が梅毒の伝染経路となるかどうかについて論じられたことがあるが、⁹ 今回の論争は純粋に道徳的な問題である点で様相を異にする。この問題は、まず 1859 年 1 月から 10 月にかけて *Lancet* で、ついで 1860 年代前半には *British Medical Journal* に場を移して、同じ論者を中心に議論された。

未婚の乳母を積極的に雇用しようと主張したのは、ロンドンの産科医、William Acton であった。未婚の乳母が現実にならなく存在していたとはいえ、未婚であることを明らかにすることには抵抗があった時代に、その存在を顕在化させ、未婚の乳母こそ積極的に雇うべきだと主張したのである。その論点は、未婚の母を乳母として雇えばその女は娼婦にならなくてすむ、というもので、未婚の母救済を眼目に据えたものであった。Acton は、レディのなかに授乳できない人が多いのは、医者ならだれでも知っていることであるが、だからといってリスペクタブルな既婚の乳母を雇いたいと思っても、非常に難しい。未婚の母を乳母として雇うことは、二つの問題を一挙に解決する得策である、と主張した。

We are speaking of the young house-maid or pretty parlour-maid in the same street in which the sickly lady has given birth to a sickly child, to whom healthy milk is life, and anything else death. With shame and horror the girl bears a child to the butler, or the policeman, or her master's son. Of course she is discharged; of course her seducer is somewhere else; of course, when her savings are spent, she will have to take, with shame and loathing, to a life of prostitution. ("Unmarried Wet-Nurses" 175)

Acton は、未婚の母がレディと同じ通りに住む、悪い男にだまされた“poor girl”であることを強調し、その娘を乳母として雇うことが“falling woman”を“fallen woman”にしないための唯一の方策であると主張する (“Child-Murder and Wet-Nursing” 183)。

しかし、このような主張には真っ向から反対が唱えられた。まず、乳を通して授乳者の道徳的性質が伝わるという考えがまだ一般的であった時代、いくらだまされたとはいえ、不道徳な行いをした未婚の乳母を雇うなどもってのほかであると考えられたであろうことは推測に難くない。実際、反対派の議論においては、必ず、不道徳な性質が伝染する危険性につ

いてふれられている。¹⁰

反対派の先鋒が、道徳的性質伝染の危険性とともに対抗の理由としてとくに注意を喚起したのは、乳母の子どものことである。いうまでもないことだが、乳母として働けるということは乳汁を分泌しているということ、すなわち乳母自身が最近出産して、その乳を必要とする子どもを持っているということである。一方、19世紀イギリスでは、乳母が雇用先の家に住み込んで働くのが慣例となっていた。母親が他家でよその子どもに授乳している間、実の子はだれからどのような世話を受けることになるのだろうか。先の Acton による未婚の乳母雇用推進論が出た次の週の *Lancet* で、“Mater” というペンネームの筆者は、未婚の母を乳母として雇うことは、乳児殺しに等しいと批判する。未婚の乳母を雇用することは、子どもから母を奪うことになり、母の乳を飲めなければ、その子は衰弱死するしかない。未婚の母を乳母として雇うことは、これすなわち乳児殺しを容認することにほかならない、と主張する。

What becomes of the “poor girl’s” child, which is put aside to make way for the interloper?—we are told not of its fate. Now its death is sometimes sudden, sometimes slow, but in any case it almost always falls a sacrifice to that tyrant custom, *wet-nursing*. (201)

確かに正論であるうえ、未婚の乳母雇用推進派の Acton は乳母の子が置かれることになる境遇についてはまったくふれていない。しかし、母親と母乳を奪われるということでは、既婚の乳母の子も同じ運命にさらされるのではないだろうか。未婚・既婚を問わず、母親が乳母として働きに出れば、乳母の子は生得の乳を失うのである。

未婚の乳母雇用反対論を展開するにあたって、乳母の子の運命に注意を喚起する“Mater”は、乳母が既婚であるか未婚であるかの違いを曖昧にして、乳母雇用の習慣全体に批判を広げている。つまり、“Mater”は、乳母が未婚だから反対しているのではなく、乳母が問題になった機会を利用して、乳母雇用の制度全体に、なかんずく乳母を雇う母親に批判を加えようとしているといえる。乳母の子から生得の権利である乳を奪うことの非道徳性を訴えつつ、乳母雇用階級の母親は流行を追い求める生活をやめて“maternal duty”を果たすべきであると主張する。遊惰な生活に溺れ、授乳という母親としての義務をなおざりにする母親は“a foul blot on the moral

escutcheon of the mothers of England!” であるとさえいうのである (201)。“Mater” は、人道主義的乳母反対論を展開しながら、実は乳母を雇う母親を批判しているのである。すなわち、ミドルクラスの母親に、規範である母乳哺育をするよう促すために乳母問題を利用しているといえる。

5. 乳母とドメスティック・イデオロギー

“Mater” は、乳母を雇用する母親を批判するために、未婚の乳母が問題になった機会を利用して乳母反対論を展開したわけだが、ここでもう一度、未婚の乳母を既婚の乳母と区別してその雇用を勧める Acton の主張をみてみよう。

Acton は、リスペクタブルな既婚の乳母を雇いたいと思っても非常に難しいと嘆くが、同時に労働者階級の既婚女性が乳母として働きたがらないことを、正しい母親のあり方として肯定する。

[I]f they were . . . paragons of virtue and maternal rectitude, they are not to be got; and it speaks right well for English working mothers that they are not. Every accoucheur will bear me out in this, that no wages can procure married women of any pretence to respectability to raise one-half the children whose mothers cannot and will not. (“Unmarried Wet-Nurses” 175)

このように、乳母になりたがらないイギリス労働者階級の母親を褒め称える Acton は、逆に、既婚の母親が乳母になることには否定的な評価を下す。

A married woman who voluntarily leaves her own child for money may not be much better than the girl accidentally seduced, who nurses another’s child for bread. (“Unmarried Wet-Nurses” 175)

既婚の母親が金のために子どもを置いて働きに出ることが問題にされているということは、労働者階級の母親にも、ドメスティック・イデオロギー
既婚女性は家庭の天使として夫・子どもの幸福を守る存在 にもとづく母親の規範が適用されているということである。

Chavasse も Acton 同様に未婚の乳母を勧めた。問答形式で書かれた育児書のなかで、未婚と既婚のどちらの乳母を選ぶべきであるかという問いに

対して、未婚の乳母の方を勧めているのである。結婚して家庭があるのに、自分の子を置き去りにして金のために他人の子に授乳するような母親は“an unnatural mother”なので、乳母として不適格である、と断るのである (*Counsel to a Mother* 36)。未婚でも自分の子がいるという点では変わりがないのだから、既婚の母が乳母となることの「不自然さ」は、彼女が夫の支配する家庭を出る点にある。

実際に、既婚の乳母を雇ったために、トラブルに巻き込まれた家庭もあった。Bertrand Russellの父親、Lord Amberleyの日記によると、1865年8月、既婚の乳母を雇ったが、2日後に夫が連れ戻しに来たとのことである。妻が夫に相談しないで乳母として働くことを決めてしまったようであるが、Lord Amberleyは夫が連れ戻しにきたことに対してとくに抗議をした様子もなく、すぐに別の乳母を雇っている (Hellerstein 222)。労働者階級であっても夫の権利は侵害すべからざるものとして扱われているようである。

既婚の乳母が母親の規範に抵触するとして雇用を控えることが促されたのにひきかえ、未婚の母を乳母として雇うことが奨励されたという事例が意味するのは、未婚の母には母親の規範が適用されないということである。Actonのいう“maternal rectitude” (175) は既婚の母親のみが、つまり夫のいる家庭を持つ妻のみが持つものであり、家父長制の管理下でない未婚の母は持つとは考えられていないことがわかる。規範から外れているということは、一見すると道徳的に不利な要素と考えられ、現実にも多くの人がそのことを理由に未婚の母の乳母雇用に反対していたのだが、Actonらは、規範から外れていることを道徳上の問題とするのではなく、逆に有効利用しようとしているようにみえる。つまり、未婚の母はそもそも家父長制の枠外に位置するので、家父長制が既婚女性に適用する規範に基づく判断を免れることができるのである。

労働者階級であっても、既婚者にはミドルクラスと同じ母親の規範が適用されたとすれば、Lord Amberleyのように揉めないためにも、先に*Times*の広告に出されていたのをみたように、はじめから未婚の乳母を求めるという選択も考えられる。夫の権利を侵害しない未婚の乳母を求めるといふ、家父長制に配慮した選択基準の存在が推測できるのである。

未婚の乳母雇用について、“Mater”は反対、Actonは賛成と、表面上は真っ向から対立する形になっているが、その議論をよくみると、結局両者ともミドルクラスの規範を守ろうとしているという点では同じである

ことがわかる。“Mater”がミドルクラスの母親に対して慈愛にあふれた家庭の天使らしく授乳するよう促せば、一方 Acton は、労働者階級ではあっても、いったん結婚したら妻は夫の支配下にとどまるべきであると論ずる。それぞれミドルクラスの規範を存続させようとする態度である。

乳母について語っているようにみえて、それらは結局、ミドルクラスが自分たちについて語っているのである。

6. リスペクタブルな未婚の母 Esther Waters

短い求職広告の文句以外では長らく声を持たない存在だった乳母が、初めて声を与えられたのは、1894年に出版された George Moore の *Esther Waters* においてであるといつてよいだろう。ここでは、未婚の乳母の雇用を推進する Acton にしたがえば母親の範疇から除外されている未婚の母が、母親としての立場で雇用階級の母親を正面から批判するのである。

作品をみる前に、乳児哺育との関連で、時代背景について確認しておこう。この作品は1870年頃が舞台になっているが (Moore 397)、発表されたのは1894年で、人工哺育の安全性がかなり高まっており、母乳が与えられない場合でも必ずしも乳母を雇う必要はなくなっていた時期である。¹¹ 先の統計表を見てもわかるように、*Times* にも乳母の求職・求人広告はほとんど出なくなっている。したがって、乳母雇用の習慣を気兼ねなく批判できる時代状況になっていたといえる。

さて、物語の主人公 Esther は、信仰心は篤いものの読み書きはできない。ある屋敷にメイドとして勤めているとき、同じ屋敷の使用人であった若者の「結婚するから」との言葉を信じて関係を持ち、妊娠する。妊娠が発覚して仕事を解雇され、実家のあるロンドンに戻って、慈善産院で出産する。妹から、乳母が割のいい仕事であることを聞き、産院から紹介を受けて、Mrs. Rivers という人の乳母となる。給料は妹から聞いていた週給1ポンドより安く、週15シリング。生後1ヶ月の子どもは週6シリング払って Mrs. Spire といふベビー・ファーマーに預ける。

ここで Esther は *Dombey and Son* の乳母 Polly のような、ミドルクラスにとっての理想的な母親代理にはならない。妊娠を自覚した時点から赤ん坊は自分が守らなければならない存在であると考えており、乳母となっても、何よりもまず、自分の子どもの母親であることを忘れない。勤め先に着くとすぐ、雇い主である Mrs. Rivers に対して、授乳できないほど体が

弱そうには見えない、と率直に感想を述べ(144)、夫人が赤ん坊をあやしているときに、嫌がられるのも気にかけず自分の子どものことを話したりする(175)。母親が授乳しないのは体が弱い場合以外ありえない、同じ赤ん坊を持つ身なら、我が子をかわいいと思う気持ちを共有できるはずだ、と素朴に考えているのである。

勤め始めて10日から2週間たったころ、Estherは我が子に会いに行かせてほしいと頼むが、そのときも、夫人が我が子の心配をするように、自分も残してきた子のことが心配なのだと、同じ母親としての立場を訴えるよりどころにする。しかし、これに対するMrs. Riversの返答は、Estherが母親であることを全く無視したものである。乳母を子どもの所に会いに行かせるなどということは、“no mother could”(146)だと言うのである。Mrs. Riversにとって、「母親」とは自分と同じ階級の母親だけであって、乳母が、それも未婚の母である乳母が母親でありうるなどということにはまったく思い至らない。

実はMrs. RiversはEstherの前にも乳母を二人雇ったことがあるのだが、彼女たちの子どもは母の乳を奪われて結局死んでしまった。Estherは、“It is a life for a life—more than that, ma’am—two lives for a life; and now the life of my boy is asked for”(150)と、夫人の子どもは乳母の子二人の命を犠牲にして生きていると指摘する。この、犯罪の糾弾に等しいような言葉を聞くと、夫人は動転し、我を忘れて、Estherにむかって、お前の子は足手まといになるだけだ、父親のいない子どもを育てあげることなどできるはずがない、と口走る。これに対してEstherは、父親がいなくてもそれは子どもの責任ではない、あなたも自分で授乳すれば子どもを軽視するようなことは言わなかったはずだと、乳母雇用階級の母親の考え違いと、授乳を厭う態度を批判する。続いて、乳母制度が非嫡出子を葬り去るしくみを、次のように述べる。

“[F]ine folks like you pays the money, and Mrs. Spires and her like gets rid of the poor little things. Change the milk a few times, a little neglect, and the poor servant-girl is spared the trouble of bringing up her baby and can make a handsome child of the rich woman’s little starveling.” (151)

Estherの批判は、たとえば、乳母の子どもが生得の乳を失うことを強調して乳母雇用を非難していた“Mater”の主張とよく似ていると指摘すること

はできるだろう。しかし、乳母を雇って自分では授乳しない母親を諷めるために、いわば方便として用いられた“Mater”の乳母雇用批判とは違って、Esther は自分の子を守るうとする母親としてこれらの言葉を発している。医者や社会改良家に代弁されるのではなく、さまざまな言説においてそれまで声をもたなかった乳母自身が自らの感情をほとばしらせて発言していることは注目に値する。

「結婚するから」との言葉を信じて身を任せただめに妊娠し、未婚の母となった Esther は、まさに未婚の乳母雇用に奨励していた Acton が描いた“falling woman”、すなわち娼婦予備軍である。しかし、乳母の子のことは全く考慮の外にあり、Mrs. Rivers と同じように乳母が自分の子を育てる存在であるとは考えてもいないように見える Acton に挑むかのように、Esther はまぎれもなく母親であることを、それもリスペクタブルという語の最高の意味においてリスペクタブルな母親であることを主張している。

7. おわりに

乳母に関する言説の大多数を生産していたのは雇用者側の階級である。乳母雇用の賛否いずれを主張するにしても、そこには雇用者階級の事情と価値観が色濃く投影されている。労働者階級にドメスティック・イデオロギーを押しつけて母親に家にとどませようとする、既婚の乳母が雇えなくなり、それによって未婚の乳母を雇用せざるを得ない状況が生み出される。未婚の乳母は妻ではないので家庭的存在ではなく、したがって母でもないとみなされる。しかし、未婚の乳母がリスペクタブルな母親であることを表明するにおよび、家にとどまって家事・育児に専念するのが理想的な母親であるというイデオロギーの土台は崩れることになる。家父長制の支配下でない未婚の母が、家父長制の支配下にしかないと考えられていた慈しみ育てる「理想の母」であることを突きつけているからである。

かくして、乳母が残した唯一の言葉ともいえる求職広告中の「リスペクタブルな未婚の母」という表現は、単に矛盾した広告文句ではなくなり、乳母雇用階級の身勝手さを鋭く突いた未婚の母の存在証明となるのである。

注

* 本稿は日本ヴィクトリア朝文化研究学会第2回全国大会(2002年11月16日、^{ウェットナース}於大手前大学)において「ヴィクトリア時代の乳母と労働者階級の母性」という題目で口頭発表した原稿に加筆・訂正をほどこしたものである。

- 1 たとえば、Andrew Combe の *The Management of Infancy* の第10版(1870)では、“Choice and Regimen of a Nurse” という章に10頁以上、また、Thomas Bull の *The Maternal Management of Children* の第13版(1875)でも、乳母の選択方法、食事などに10頁が割かれている。Wickesによれば、T. J. Grahamの育児書では、1865年版でも乳母に関して33頁も費やしているということである(418)。
- 2 ^{ウェットナース}*Times* における乳母の求職・求人広告件数は次のような方法で集計した。1831年から1891年までの10年ごとに、毎月の最初の火曜・木曜・土曜に出された求職広告と求人広告の数を数えた。また、後の議論に必要なので、各年の総数の後の括弧内に、乳母候補者の既婚・未婚の別を加えた。広告文にこの情報を含めていないものについては不明とした。

年	求職数(既婚・未婚・不明)	求人数(既婚・未婚・不明)	合計(既婚・未婚・不明)
1831	12(7・0・5)	1(0・0・1)	13(7・0・6)
1841	42(10・0・32)	4(0・0・4)	46(10・0・36)
1851	40(19・1・20)	5(1・0・4)	45(20・1・24)
1861	84(29・8・47)	7(0・0・7)	91(29・8・54)
1871	21(4・2・15)	2(0・1・1)	23(4・3・16)
1881	9(4・1・4)	1(0・0・1)	10(4・1・5)
1891	1(0・0・1)	0(0・0・0)	1(0・0・1)
合計	209(73・12・124)	20(1・1・18)	229(74・13・142)

- 3 1890年 *Contemporary Review* に掲載されたペビー・ファームの悲惨さを告発する論文のなかでは、国会議員が乳母を雇っていたことが記されている(Waugh 709)。1903年 *Lancet* に発表された論文で、Robert Hutchison は、人工哺育は難しさが強調されすぎているが基本は簡単なのだと書いている。このことは、20世紀に入ってもなお、人工哺育は困難であるという印象を持たれていたことを示している。
- 4 Dickens が *Dombey and Son* で乳母を代理母として理想化したことについては、拙論「汚染源から道徳的影響力へ 『ドンビー父子』の乳母」(『筑波英学展望』第21号2002年63-72)を参照されたい。

- 5 乳母と他の使用人との給料の違いについて、*Times* の求人広告を参考に比較すると、1851年10月7日の求人広告で、乳母 (wet nurse) には週給 10 シリングが提示されている。一方、同年 12 月 6 日の授乳しない乳母 (nurse) への提示額は週給 4 シリングであり、倍以上の開きがある。乳^{ウェットナース}母が他の使用人と友好的な関係を築くことが難しくなりがちなのは、乳母が基本的に短期間の雇用であることも関係している。医師の書いた育児書でも、使用人のなかでの位置づけについてまでアドバイスをしているものがある (Bull 63)。
- 6 たとえば Chavasse は、“It is an old, and I believe, a true saying, that the child inherits the temper of his mother or of his wet nurse.” と述べている (*Advice to a Wife* 270)。Bull も “The principal points which the parent must investigate for herself (independent of the medical attendant’s enquiries) have reference to *the moral qualifications* of the applicant; and if there is found to be any defect here, however healthy or otherwise desirable, her services ought to be declined.” (57) と、気質の点で問題があれば、他の条件がいかによくても雇用を控えるよう指示している。
- 7 労働者階級を汚染源とみなす考え方があったことから、乳母から養い子に感染するという先入観が強かったが、実際には、先天性梅毒の養い子から乳母にうつる事例も多かった。それでも、梅毒をうつされた乳母が、次に乳母として雇用された先で、養い子に感染させる事もあったので、乳母が感染経路になったことは確かである。しかしその場合でも、病原菌は乳母の乳房にできた梅毒性潰瘍の中にあるのであって、乳汁の中にあるわけではない。
- 8 注 2 の統計表参照。
- 9 たとえば 1846 年後半の *Lancet* には、乳母が梅毒を媒介するかどうかについて、Gavin, Acton, Egan の論文が次々に掲載された。
- 10 未婚の乳母の雇用に反対した C. H. F. Routh は次のように述べている。“Now when a woman suckles a child she undoubtedly communicates to it the distillation, as it were, of the vital essences of her own blood; and thus it is that if a nurse of confirmed vicious and passionate habits suckles a child, that child is in danger of having its own morality tainted likewise.” (580)
- 11 人工哺育が信頼できるものになる画期としては、1857 年 Pasteur による牛乳の殺菌法開発、1880 年の水の塩素殺菌開始、1885 年の無糖練乳開発などがある。人工哺育の発達については Baumslag and Michels の第 4 章を参照のこと。

引用文献一覧

- Acton, William. “Child-Murder and Wet-Nursing.” *British Medical Journal* 16 Feb. 1861: 183–84.
- . “Questions of the Contagion of Secondary Syphilis—Can a Nurse Become Affected with Syphilis from Suckling a Child Labouring under Secondary Symp-

- toms? Instance Bearing on the Question” *Lancet* 1 Aug. 1846: 127–28.
- . “Unmarried Wet-Nurses.” *Lancet* 12 Feb. 1859: 175–76.
- Baumslag, Naomi, and Dia L. Michels. *Milk, Money, and Madness: The Culture and Politics of Breastfeeding*. Westport, CT: Bergin and Garvey, 1995.
- Beeton, Isabella. *Mrs. Beeton’s Book of Household Management*. 1861. Oxford: Oxford U.P., 2000.
- Bull, Thomas. *The Maternal Management of Children in Health and Disease*. 13th ed. London: Longmans, 1875.
- Chavasse, Pye Henry. *Advice to a Wife on the Management of her own Health; and on the Treatment of some of the Complaints Incidental to Pregnancy, Labour, and Suckling with an Introductory Chapter Especially Addressed to a Young Wife*. 1839. 11th. ed. London: J. and A. Churchill, 1875.
- . *Counsel to a Mother on the Care and Rearing of her Children; Being the Companion Volume of “Advice to a Mother of the Management of her Children.”* 3rd. ed. London: J. and A. Churchill, 1874.
- Combe, Andrew. *The Management of Infancy, Physiological and Moral: Intended Chiefly for the Use of Parents*. 10th ed. Rev. and Ed. James Clark. Edinburgh: Maclachlan and Stewart, 1870.
- Dickens, Charles. *Dombey and Son*. 1848. Ed. Peter Fairclough. Penguin Classics. Harmondsworth: Penguin, 1985.
- Egan, John C. “Instance of Disease Contracted from a Nursed Child: With a few remarks on the question—‘Is Secondary Syphilis Contagious?’” *Lancet* 1846: 214–15.
- Gavin, Hector. “A Report Relative to the Question, ‘Is Secondary Syphilis Contagious?’” *Lancet* 18 July 1846: 62.
- Hellerstein, Erna Olafson, Leslie Parker Hume, and Karen M. Offen, eds. *Victorian Women: A Documentary Account of Women’s Lives in Nineteenth-Century England, France, and the United States*. Stanford: Stanford UP., 1981.
- Hutchison, Robert. “An Address on the Artificial Feeding of Infants.” *Lancet* 19 Sept. 1903: 803–05.
- “Mater.” “Wet-Nurses from the Fallen.” *Lancet* 19 Feb. 1859: 200–01.
- Moore, George. *Esther Waters*. 1894. Ed. David Skilton. Oxford: Oxford UP., 1995.
- Routh, C.H.F. “On the Selection of Wet Nurses from among Fallen Women.” *Lancet* 11 June 1859: 580–82.
- The Times*. Advertisements in 1831, 1841, 1851, 1861, 1871, 1881, and 1891.
- Waugh, Benjamin. “Baby-Farming.” *Contemporary Review* May 1890: 700–14.
- Wickes, Ian G. “A History of Infant Feeding.” *Archives of Disease in Childhood* 28 (1953): 151–58, 232–40, 332–40, 416–22, 495–502.

fore, this rhetoric of “femininity” must also be associated with Gaskell’s strategies to survive as a woman writer.

The Rise and Fall of Literature in Victorian Manchester

Ayaka KOMIYA

During the Victorian period, Manchester, Cottonopolis, became England’s and therefore the world’s largest industrial city. No doubt it was the bustling centre of business, but where did it stand in the world of literature? Manchester’s contribution to Victorian literature remains underrated. In fact, it was, at least for a time, the city that led Victorian literature. It was there that social novels were born; it was there that the era of ‘new journalism’ started. This paper presents a picture of how the Mancunian spirit helped literature to flourish, and then how its abatement resulted in the eventual decline of the city’s production of literature.

Respectable and Single: The Wet Nurse Discourse in Victorian England

Motoko NAKADA

This essay examines how the wet-nursing practice evoked controversy in Victorian England at a time when the ideology of breast-feeding was prevalent among the middle-class. Though in slow decline, various discourses show that wet-nursing was still rather common in England. Some regarded a wet nurse as a troublesome servant, while others feared her as a source of moral and physical pollution. And the subject of wet nurses, especially those who were unmarried, excited controversy in medical journals where they were often criticized as immoral. In spite of this, classified ads show that wet nurses were sought

after by some families, and further, that applicants sometimes stated their single status—information which would otherwise have been disadvantageous in the moral climate of the time. For some, single wet nurses were preferable to their married counterparts because they did not disrupt the patriarchal order, which demanded that wives stay at home to do only housework. In their position outside the patriarchal order of society because they were not wives, unmarried wet nurses could be used as commodities free from the risk of provoking patriarchy. Thus, while wet nurses could form the subject matter of discussion, they had no recourse to state their own thoughts and feelings. This would all change, however, at the end of the 19th century, when an unmarried wet nurse finally got up to declare that she, though regarded as outside the patriarchal order and not as a mother at all by middle-class values, is certainly a mother for her own child. In George Moore's *Esther Waters* an unmarried wet nurse shows that she is more motherly than the middle-class mother by whom she is employed. Esther criticizes her employer for not feeding her baby herself. With this novel a wet nurse could finally refute all the middle-class prejudices against wet nurses and show the respectability of the single mother.

George Eliot—her literary apprenticeship

Shigeo TOMITA

In *The Cambridge Bibliography of English Literature*, the total number of female writers in 19th Century England is estimated at around 4,000. However, of this total, only a select few, namely Austen, Charlotte Brontë, Gaskell and George Eliot are still remembered today. While most disappeared from view due to their works' poor quality, Nigel Cross suggests that the narrow literary horizons of women at the time, caused by lack of education, opportunity and property, was also a major factor making it difficult to achieve artistic distinction. As compared with them, Eliot found her path to the literary world facilitated via fortunate opportunities.

The aim of this paper is to examine the formative period prior to her writing